直言

唯一無二であることの誇りをもち 徳洲会の価値をさらに高めていく

弱い人の味方となって公明正大に真摯に地道に

医療法人徳洲会 理事長
一般社団法人徳洲会 理事長
東上 震一

遠い昔のちょっとした心の傷として、胸に秘めていたことを書かせていただきます。小学6年時の卒業に際し、生徒たちの「座右の銘」を校長先生が揮毫してくださることになりました。私は担任の先生とは、どうにも折り合いが悪く、些細ないたずらを理由に、長々と廊下に立たされたり、反省文を書かされたりすることが少なからずありました。座右の銘など持ち合わせていない年齢ですから、困り果てた私は、今から思えば幼い反発心と自尊心であったのか、「世界に一人」という文言をひねり出して提出しました。「こんなのは座右の銘とは言いません」。半ば予想通りの担任の言葉とともに返された綺麗に墨書された書札を、「すいません」と頭を下げて受け取ったほろ苦いエピソードは、長く記憶の隅に仕舞われることになりました。

「宇宙無双日 乾坤只一人」 自信をもち生きよという教え

「宇宙無双日 乾坤只一人」。これは『五燈会元』という中国・南宋代（1252年）に成立した禅宗の歴史書に出てくる言葉です。宇宙に太陽はふたつとしてないように、乾坤（天地）には、あなたという人間はただひとり、自信をもって生きなさいという教えです。さまざまな本を渉猟する趣味のなかで、たまたま出会った「乾坤只一人」によって、幼い頃に胸に仕舞った「世界に一人」の言葉も長い時を経て心に居場所を得ることになったのです。太陽が唯一の存在であるように、あなたもまた唯一の存在である。唯一であることに意味と、その価値を見出す考え方です。

徳洲会は今年で創立50周年を迎えました。34歳の徳田虎雄・名誉理事長がたった一人で始めた「徳洲会」という社会運動（いつでも、どこでも、誰でもが最善の医療を受けられる社会の実現）が、50年という歩みのなかで、日本最大の民間医療グループとして結実し、現在も成長し続けているこの軌跡が、唯一無二であると私は考えています。何も手本にするものはなく、私たちが信じる理念、“生命だけは平等だ”の下、社会的弱者（病気に苦しむ人、体が弱い人、貧困に身を置かざるを得ない人）の側に立って物事を判断し、病院や介護・福祉施設をつくり続けているのです。もちろん創業から約40年に及ぶ長い苦闘の期間は、徳田虎雄という傑出した人物の血を吐くような努力と、グループを運営する並外れた才覚を抜きにしては語れません。

徳洲会に訪れた偶然の幸運は 社会が必要としたが故の必然

大阪・松原の地に見付けた病院用地買収の頭金100万円にも事欠く状態で、自殺しても支払われる生命保険を担保に、事業が上手くいかなかった時には「病院の屋上から飛び降りて弁済します」という必死な決意と、徳田夫妻で練り上げた事業計画を持って、多くの銀行を訪れ融資をお願いしたのです。しかし、ほとんど全く相手にされませんでした。たった1カ所、融資に応じてくれた銀行での経緯をぜひ紹介したいと思います。私が唐突に徳田夫妻と表現した理由が、わかっていただけるはずです。その日、銀行回りで期待する結果が得られず疲れ果てた徳田先生は、「もう3時を過ぎたから今日は終わりにしよう」と、弱音とも取れる言葉を漏らしたそうです。しかし、短い銀行勤めの経験があった夫人は、「閉店時間3時を過ぎても、まだ多くの行員は残っているはずですから、電話してみます」と、交渉し支店長との面会を取り付けたのです。強面の徳田先生からは想像もつかない、夫人に励まされ背中を押される姿を知った時、私は「人間徳田」に触れ得たようで、何故かほっとしました。

その銀行から1億8,000万円の融資を受け、60床の徳田病院（現・松原徳洲会病院、189床）を開院、これが徳洲会マジックの始まりとなったのです。徳洲会の歴史を振り返った時、マジックと表現せざるを得ないような、その時々で偶然とも取れる幸運が徳洲会を訪れました。私たちに訪れた偶然の幸運は、社会が徳洲会という存在を必要としたが故の“必然”であったとも考えられます。徳洲会が弱い人の味方になって、公明正大な運営をし、医療の質を高めることに真摯に汗をかき続けるなら、偶然を装った幸運はこれからも訪れ続けると信じています。唯一無二の存在である徳洲会の価値をさらに高めていく必要があります。求める理想は日々の地道な努力の積み重ねの延長線上にしかありません。

皆で頑張りましょう。

ドラッグステーション導入から1年

病棟業務を一層強化

仙台病院

仙台徳洲会病院は2022年4月の新築移転時、自動薬剤ピッキング装置「ドラッグステーション」をグループで初導入、それから1年余りが経った。煩雑な薬局業務を自動化したことで、薬剤師は病棟業務などに注力でき、医師や看護師、患者さんとのコミュニケーションが活発化、より専門性を発揮している。

「病棟常駐で薬剤師の専門性が発揮できます」と鈴木・副薬局長

ドラッグステーションは常時800の薬品をセットし、処方データに応じて払い出す薬品を自動でピッキングできる装置。薬剤師が薬品棚の前を動き回ることなく、正確なピッキングが可能となり、調剤業務の効率化につながる。同院は新築移転時に6病棟から8病棟に増えたが、薬剤師の数を増やすことなく、すべての病棟で常駐業務が可能となっている。

鈴木貴洋・副薬局長は「類似した薬品名や規格違いなどによるピッキング時のインシデント（ヒヤリハット）がなくなりました」と効果を実感。病棟業務について「常駐することで患者さんごとに薬の流れを把握でき、より正確な服薬指導ができます。また、医師や看護師からの薬の相談にも随時応じられ、より専門性を発揮できると考えます」と強調する。

同装置は、導入前の実績を考慮してセットする薬品を決定。現在は内服薬と点眼薬だけをセットしているが、1年間の稼働状況から、今後は塗り薬を追加するなどセットする薬品の種類を見直す予定だ。また、薬剤師がより専門性の高い業務に専念できるように、調剤助手を増員し、同装置でのピッキング作業を任せることも考えている。

自動薬剤ピッキング装置「ドラッグステーション」をグループで初導入

鈴木・副薬局長は「次の課題として、『医師の働き方改革』によるタスクシフトにも対応できるように、体制整備やスキルアップが必要です」と展望している。

茅ヶ崎病院

新入職員の紹介動画を作成 コミュニケーション円滑に

新入職員が加わり新たな気持ちで地域医療に貢献

茅ヶ崎徳洲会病院（神奈川県）は職員同士のコミュニケーションをより円滑にすることを目的に、昨年度に続き新入職員紹介動画を作成した。

新型コロナ感染症対策のため、朝礼などで挨拶や自己紹介を行う機会がないうえに、業務中はつねにマスクやアイシールドを着用していることから、とくに他部署の新入職員だと顔と名前を覚えるのが難しい。そこで、顔や名前、人柄などを知ることができるよう、新入職員が素顔で自己紹介を行う動画を作成。職員であれば電子カルテ用のパソコンで動画を閲覧できる仕組みだ。

今年度、同院には看護師、薬剤師、臨床工学技士、診療放射線技師、理学療法士、事務職員ら21人が仲間に加わった。動画では各職員がそれぞれの出身地や趣味、抱負を語り、今後の成長を誓っている。

入職式で立川隆光院長は一人ひとりに辞令を手渡し、「私たちは地域医療に貢献することを使命としています。患者さんとともに歩み、笑顔と感動を創造することが私たちの目標です。新入職員の皆さんもその一員として頑張ってください」と理念や方針を説きながらエールを送った。

神戸病院

各部署が苦悩や気付きなど共有

新型コロナ3年間を振り返る

竹田副院長が司会を務め、3年間のコロナとの闘いを総括

神戸徳洲会病院は5月8日に新型コロナ感染症が5類感染症に変更となったことを受け、コロナに対応した3年間を振り返った。竹田洋樹・副院長が司会を務め、冒頭「2019年に発生したウイルスにより、我々の生活は一変し、医療現場でも混乱が見られ、さまざまな出来事がありました。この3年間のコロナとの闘いを総括して、これからにつなげたい」と意義に触れた。

まず竹田副院長がコロナの総論を説明した後、同院での実績を数字で報告。また、この間に起きた院内クラスター（感染者集団）についても振り返った。続いて院内の19部署が登壇し、コロナ対応の苦悩や気付きに関し発表。当時の大変だった状況を示し、どのように乗り越えたか、また今後の課題なども示した。3年間のさまざまな思い出に涙する職員もいるなか、各部署が他部署の行った工夫について知る機会となった。

最後にコロナ禍の始まりから同院の陣頭指揮を執った冨田雅史・院長補佐が「“神戸徳洲会病院の総合力”が試され、もがきながら乗りきった3年間でした」と締めくくった。今後、各部署の取り組みをまとめた冊子を制作する計画だ。